

精密総合健診(人間ドック)

動 向

平成14年度の人間ドック受診者数は、昨年度に引き続き増加傾向にある。具体的数値としては平成13年度の9,382名から9,832名と450名の増加である。

受診者数のみを捉えて軽々には言えないが、長引く経済不況下においては「健康が礎」であり、自らの健康は自分が守らなければという健康意識の向上があると考える。

このような背景を鑑み健診機関は、受診者の期待に応えるシステムとして、個々の受診者ニーズに適応した健診内容の充実と効果的なフォローアップシステムを提供することが求められている。

弊会においては、精度の高い健診・診断、快適な環境・設備といったアメニティは当然のことながら、心身両面にわたる不安を取り除いてくれること。ライフスタイルに根ざした専門的なアドバイスを受けられること。そして万が一、異常があった場合でも信頼して受診できる事後フォローと医療体制の提供が整備されていることが必要であると考えており、真に望まれる顧客サービスとは何かを、人間ドックを通じて受診者に提供をおこなっていく。

方法と結果

年度別受診状況を見ると、男性受診者が、平成6年をピークに漸減していたが本年は450名の増加があり、受診者数の増加に寄与した。

受診前歴をみると、男性では、初回受診が、287名増加し、2年連続も64名増加した。女性は、昨年度は、初回、前年未受診が多かったが、本年度の女性は、2年連続が264名増加した。受診者に、“ドックを毎年受診”が定着する傾向が出てきた可能性もある。

総合判定区分内訳をみると、異常なしA、心配なしBを全てクリアしている受診者は、数%で、要経過観察Cをいれても10%程度で、この傾向は変化ない。

がんの新規発見を症例別にみると、本年度は、全体で28例(0.28%)と、ほぼ平年並みに戻った。内訳を見ると、螺旋型CT導入時の平成10、11年度に6名づつの発見であったが、昨年度0であったが、本年度は4であった。乳がん検診は、検診方法を巡って話題になっているが、予防医学協会の方式がようやく社会でも受け入れられてきた。

平成12、13年度は4、14年度は6と増加傾向が見られる。子宮頸がん4例、体がんについてはほぼ横ばいである。前立腺がんについては昨年と同様の傾向である。

腎がん、甲状腺がんも、ほぼ同程度である。

主な異常所見の有所見数の変化をみると、肥満者は、男女とも増加傾向、視力低下、聴力低下は男性は女性の2倍程度で傾向に変化はない。高眼圧も、男性に多い傾向が見られる。腎泌尿器異常は、ほぼ同じである。脂質代謝異常は、男性34.7%、女性44.2%であり、男性は40-49歳をピークに中性脂肪が高く、女性は加齢とともに総コレステロールが上昇する。LDLの直接測定では、LDL>140mg/dlは、男性1,714名(29.7%)、女性1,210名(29.8%)である。尿酸高値は、ほぼ同様の傾向にある。

循環器の所見、高血圧、心電図異常、レントゲン上の心拡大の程度は、ほぼ変化がない。

胸部X線異常は、一昨年とほぼ同じ傾向、胸部CTは、例年と同じ傾向である。

肝機能障害は、例年と同じ傾向であり、HBV、HCVなど肝炎ウイルススクリーニングについてもほぼ同じである。

腹部超音波による胆石、胆嚢ポリープ、肝血管腫の頻度は変化がない。胃の所見、便潜血反応は変化がない、寄生虫については検査法に変更はないが半減している。

安静時心電図所見の内訳は、例年同様である。

過去10年の理学所見、血液生化学のトレンドをみると、39歳以下の男性で、体重増加が目立つ。同年代の平成5年では、肥満3.5%であったが、8.2%に増加している。また、加齢とともに、女性でコレステロール、尿酸も増加傾向にある。また空腹時血糖は、いずれの年代も男性に高い傾向があるが、HbA1cは、男女とも加齢とともに増加傾向がある。平成5年と比べると、平均で男性は4.9%から5.3%、女性は、4.8%から5.1%と上昇傾向にある。リウマチ因子は、加齢とともに増加するが、全体としては、年々減少傾向にある。血圧値については、平均では大きな変動がないが、JNC7、ESH-ESC、日本高血圧学会での高血圧の基準値に変更があり、糖尿病合併例、腎機能障害合併例で、さらに厳格な降圧が求められているので、定期的な血圧測定、経年管理の重要であると考えられる。最近のEBMから、随時血圧よりも家庭血圧(早朝・就寝前血圧)、夜間血圧のレベルが、脳心血管事故に重要な因子とされているので、家庭血圧の測定の推進及び記入欄が必要になると思われる。

関係の集計表は118～121頁に掲載